

A stylized, dark-toned map of East Asia, showing the Korean Peninsula, Japan, and parts of China. The map is rendered in shades of brown, green, and blue, with a textured, almost topographical appearance. It serves as the background for the text.

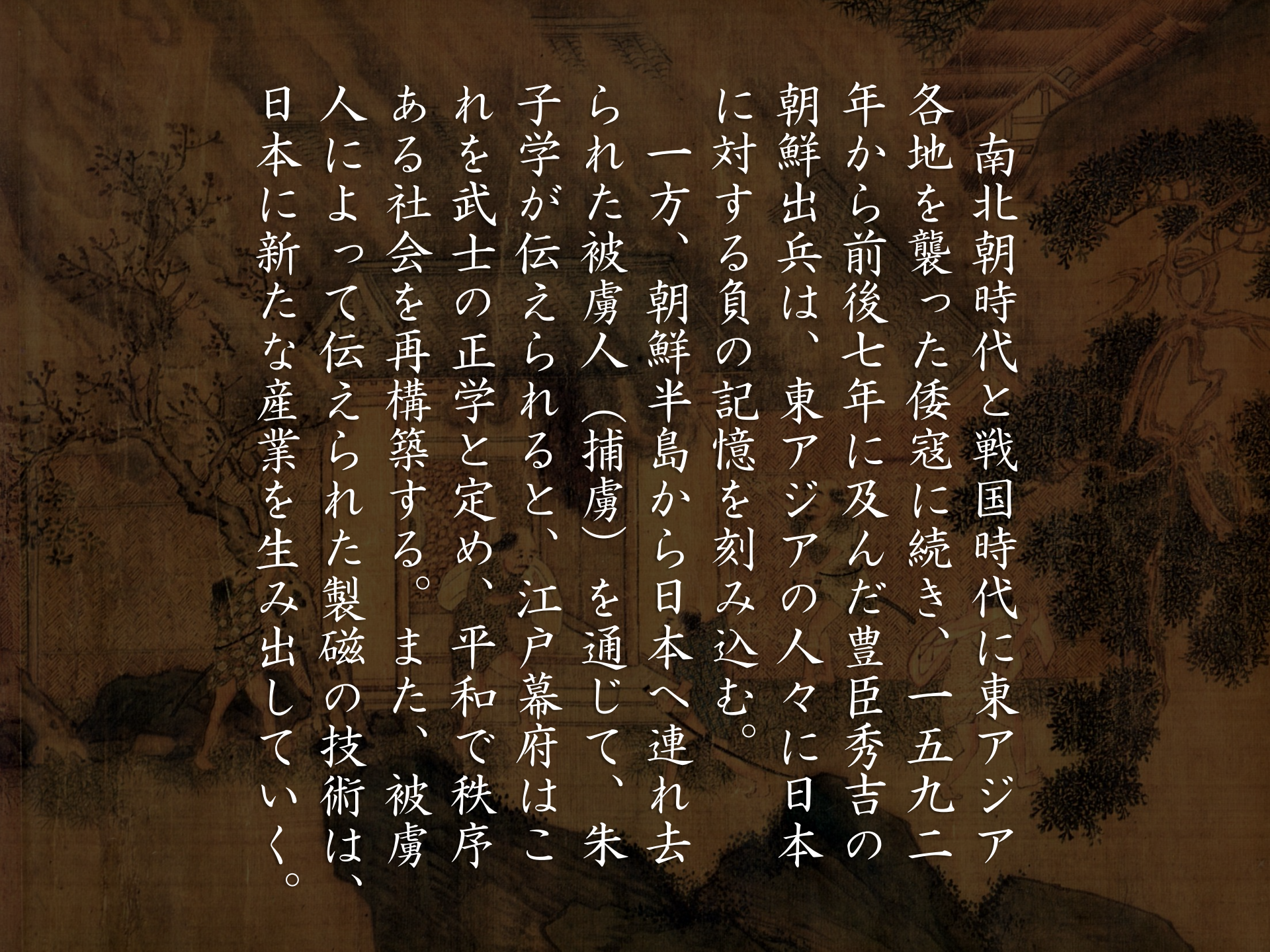
中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第九回 秀吉の朝鮮出兵

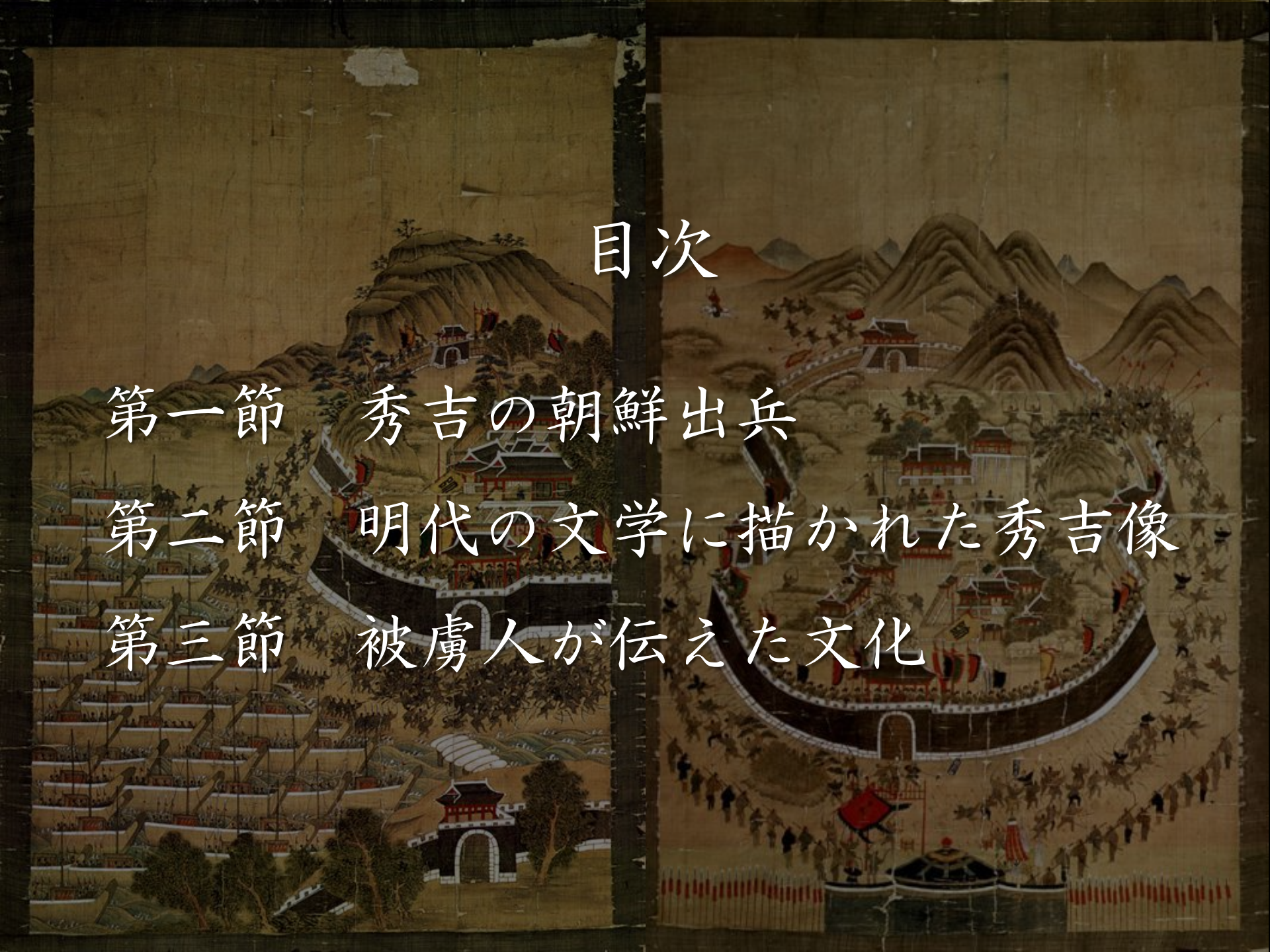


「耳塚はいま」（鈴木ゼミ2014年度生制作）



南北朝時代と戦国時代に東アジア各地を襲った倭寇に続き、一五九二年から前後七年に及んだ豊臣秀吉の朝鮮出兵は、東アジアの人々に日本に対する負の記憶を刻み込む。

一方、朝鮮半島から日本へ連れ去られた被虜人（捕虜）を通じて、朱子学が伝えられると、江戸幕府はこれを武士の正学と定め、平和で秩序ある社会を再構築する。また、被虜人によって伝えられた製磁の技術は、日本に新たな産業を生み出していく。



目次

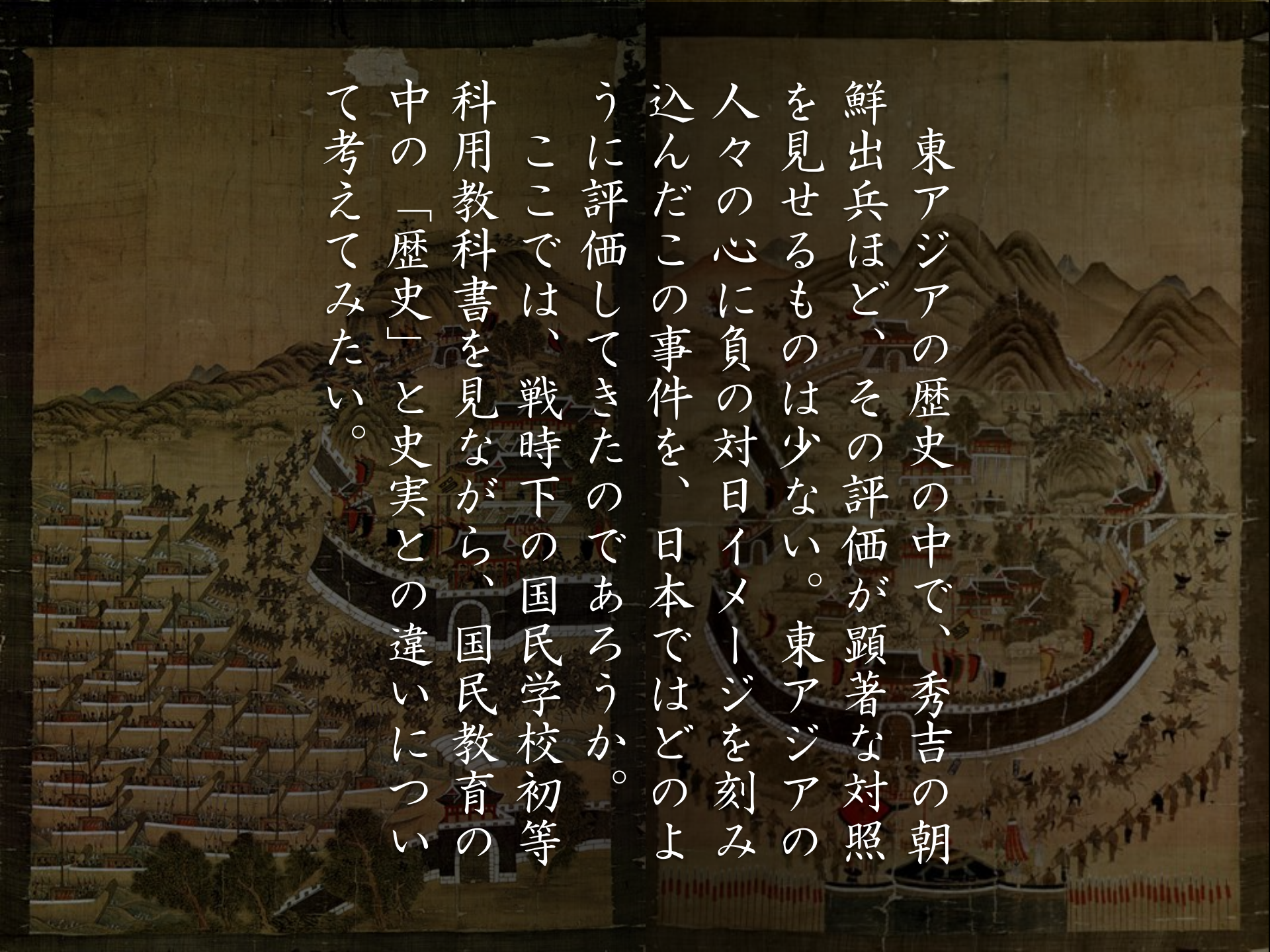
第一節 秀吉の朝鮮出兵

第二節 明代の文学に描かれた秀吉像

第三節 被虜人が伝えた文化

第一節 秀吉の朝鮮出兵





東アジアの歴史の中で、秀吉の朝鮮出兵ほど、その評価が顕著な対照を見せるものは少ない。東アジアの人々の心に負の対日イメージを刻み込んだこの事件を、日本ではどのように評価してきたのであろうか。

ここでは、戦時下の国民学校初等科用教科書を見ながら、国民教育の中の「歴史」と史実との違いについて考えてみたい。

初等科國史

上

文
部
省

初等科国史（文部省、一九四三年発行）

日中戦争が長期化する中、日本政府は、一九四一年に「皇国の道に則って初等普通教育を施し、国民の基礎的錬成を行う」ことを目的に、国民学校令を公布し、従来の小学校を国民学校に改組した。本書はそこで使われた国定歴史教科書である。

加へるなど、いろいろ政治の工夫をしました。しかも、つねに士民をいたはり、京都の北野で盛大な茶の湯を催して、人々と喜びをともしたこともあります。國民の心は、おのづからのびのびとして、元氣が國に満ちあふれました。かうして、信長が御代のしづめになるやうにとまいた種は、秀吉によつて、みごとに花と咲いたのであります。

三 扇面せんめんの地圖ちず

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へてゐました。それは、朝鮮・支那はもちろん、フィリピンやインドまでも従へて、日本を中心とする大東亞を建設けんせつしようといふ、大きな望

戦前の教科書に描かれた朝鮮出兵

秀吉は、海内平定の軍を進めながら、早くも、その次のことを考へてゐました。それは、朝鮮・支那はもちろん、フィリピンやインドまでも従へて、日本を中心とする大東亞を建設しようといふ、大きな望みでありました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

戦前の教科書に描かれた朝鮮出兵

国内がしづまると、秀吉は、いよいよ朝鮮を仲だちとして、明との交渉を始めようと思いました。……ところが朝鮮は、明の威勢をはばかって、わが申し入れに応じません。そこで秀吉は、関白を退いて太閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考えました。

みであり『初等科国史下』（文部省三九四三年発行）朝賀の使節をよこすやう交渉させたのも、そのためであります。

国内がしづまると、秀吉は、いよいよ朝鮮を仲だちとして、明との交渉を始めようと思いました。また天正十九年には、フィリピンやインドに書を送つて、入貢をすすめました。ところが朝鮮は、明の威勢をはばかつて、わが申し入れに應じません。そこで秀吉は、関白を退いて太閤となり、まづ朝鮮に出兵し、進んで明を討たうと考えました。沿海の諸國に軍船を造らせ、水夫を集め、肥前の名護屋に本陣を構へるなど、用意もすつかり整ひました。

文祿元年、宇喜多秀家が總大將となり、小西行長、加藤清正らが先手となつて、總勢十五萬餘の大軍が、名護屋を出發しました。幾千とも數知れぬ軍船に、それぞれ家紋のついた幕を張りめぐらし、思



万曆帝(1563~1620)



豊臣秀吉(1536~98)



NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年第8集」より



釜山鎮殉節圖



釜山鎮殉節圖

ひ思ひの旗を勇ましく潮風にな

びかせ、海をおほつて進みました。

釜山に上陸したわが軍は、連戦連

勝、北進また北進して、たちまち京

城をおとし、明の援軍を破り、

わづか四箇月たらずで、ほとんど

朝鮮全土を従へてしまひました。

この間、清正はたびたびの戦に、槍

のほまれ高く、拔群のてがらをあ

らはし、また、全軍よく軍紀を守つ

て、人民をあはれみ、日本武士の面

目を示しました。ただ、水軍の力

軍船の出發



戦前の教科書に描かれた朝鮮出兵

釜山に上陸したわが軍は、連戦連

勝、北進また北進して、たちまち京

城をおとし、明の援軍を破り、

わづか四箇月たらずで、ほとんど朝

鮮全土を従へてしまひました。……

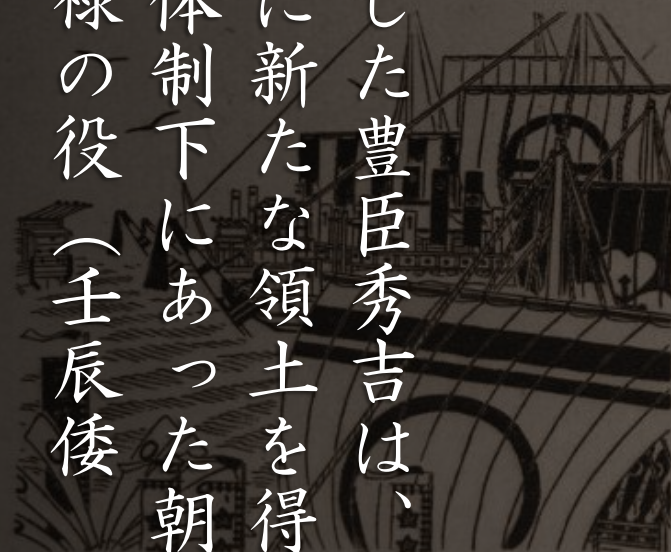
また、全軍よく軍紀を守つて人民を

あはれみ、武士の面目を示しました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

軍船の出發

ひ思ひの旗を勇ましく潮風にな
びかせ、海をおほつて進みました。
釜山に上陸したわが軍は、連戦連
勝、北進また北進して、たちまち京
城をおとし、いれ、明の援軍を破り、



天下統一を実現した豊臣秀吉は、
一五九二年、大陸に新たな領土を得
るため、明の冊封体制下にあった朝
鮮に出兵する。文禄の役（壬辰倭
乱）である。ただ、水軍の力

戦前の教科書は、この戦いの中で

日本軍は「全軍よく軍紀を守って、
人民をあはれみ、武士の面目を示
し」たというが、それは事実だろうか。



日ごろの手なみを見せ
るのは今と、出陣のこと
ばもををしく、六七倍の
明軍をさんざんに撃ち
破つて、勇名をとどろか
したのであります。

吉野甚五左衛門覚書

小西行長率いる一番隊に属した松浦鎮信の部将・吉野甚五左衛門が、小西軍の行動を中心に、秀吉の第一次朝鮮出兵（壬辰倭乱Ⅱ文禄の役）について記した従軍記。

塙保己一編『続群書類従』巻五九一所収



續群書類従

目錄

日本武將が見た朝鮮出兵

皆手を合はせてひざまづき、聞きもならわぬ唐言、「まのら、まのら」といふことは、助けよところ聞こえけれ。それをも味方聞きつけずきりすてうち捨て踏みころし、是を戦神の血祭と、女男も犬猫も、皆きり捨てて、きりくびは三万程とぞ見へにける。

吉野甚五左衛門覚書

(塙保己一編『続群書類従』巻五九一所収)



續群書類従

目錄

戦前の教科書に描かれた朝鮮出兵

ただ、水軍の力が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

て、人民をあはれみ、日本武士の面目を示しました。ただ、水軍の力



が十分でないため、軍隊や兵糧の補給がはかどらず、占領地の守備には、たいそう苦心しました。

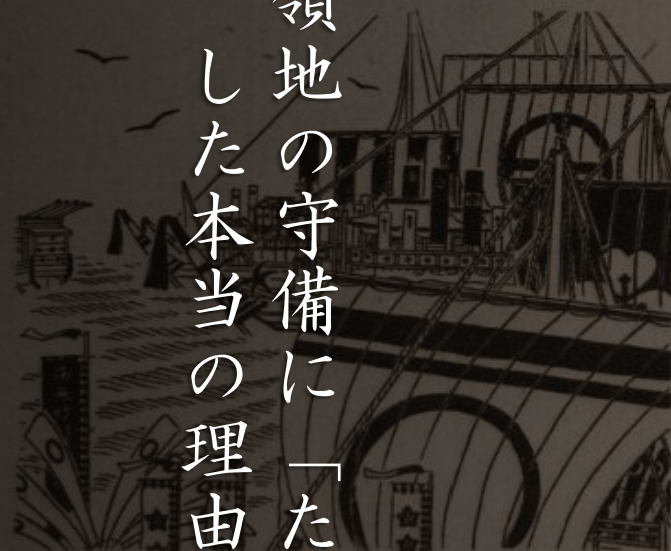
明は、大いに驚き、小西行長について講和の交渉を始める一方、卑怯にも、大軍をさし向けて、行長を平壤に破り、一気に京城へせまらうとしました。これを碧蹄館に迎へ撃つたのが、小早川隆景、立花

宗茂らでありました。

日ごろの手なみを見せるのは今と、出陣のことはもををしく、六七倍の明軍をさんざんに撃ち破つて、勇名をとどろかしたのであります。



ひ思ひの旗を勇ましく潮風にな
びかせ、海をおほつて進みました。
釜山に上陸したわが軍は、連戦連
勝、北進また北進して、たちまち京
城をおとし、いれ、明の援軍を破り、
わづか四箇月たらずで、ほとんど
朝鮮全土を従へてしまひました。
この間、清正はわが軍の戦に根
のほまれ高く、「いそがしく苦心」あ
らはし、また、全軍は軍紀を守つ
て、人民をあはれみ、日本武士の面
目を示しました。ただ、水軍の力



日本軍が占領地の守備に「た
は何か？」した本当の理由

①日本本土からの軍需物資の

が十分でない補給が滞つたため

②朝鮮半島で民衆の抗日運動
が起つたため



宗茂らでありました。
日ごろの手なみを見せ
るのは今と、出陣のこと
ばもををしく、六七倍の
明軍をさんざんに撃ち
破つて、勇名をとどろか
したのであります。



NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年第8集」より

武力戦ではかなはないと見たか、明は、ふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節が持つて来た國書の中には、特に爾を封じて日本國王と爲すといふ、無禮きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長、清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を従へました。そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめて歸還しました。この時、島津義弘

は、酒川の戦で、數十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の戦の最後を飾りました。

戦前の教科書に描かれた朝鮮出兵

武力戦ではかなはないと見たか、明はふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節の持つて来た國書の中には、爾（なんぢ）を封じて日本國王と爲すといふ、無礼きはまる文句がありました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）



万曆帝(1563~1620)



豊臣秀吉(1536~98)

武力戦ではかなはないと見たか、明は、ふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節が持つて来た國書の中には、特に爾を封じて日本國王と爲すといふ、無禮きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長、清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち南部の各地を従へました。そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめ、歸還しました。この時、島津義弘は、酒川の戦で、数十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後をかざりました。

戦前の教科書に描かれた朝鮮出兵

秀吉は大いに怒つて、その使ひを追いかへし、再征の命令をくだしました。……そのうち、秀吉は病にかかり、慶長三年八月、つひに六十三歳でなくなりました。遺言によつて、出征の諸將は、それぞれ兵をまとめ、帰還しました。

『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）

戦前の教科書に描かれた朝鮮出兵

かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機会に国民の海外発展心は一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を与えました。

は、酒川の戦で、数十倍の明軍を撃ち破り、前後七年にわたる朝鮮の役の最後『初等科国史下』（文部省一九四三年発行）



秀吉の扇

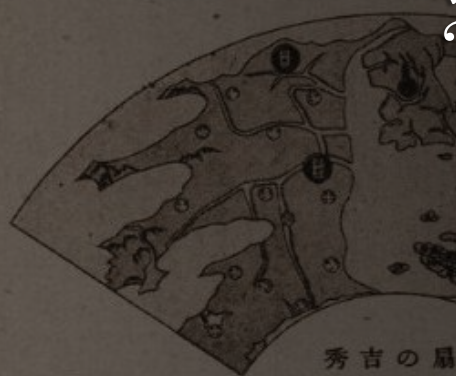
かうして、秀吉の大望は、惜しくもくじけましたが、これを機会に、国民の海外発展心は、一だんと高まりました。また、わが軍の示したりつばなふるまひは、朝鮮の人々に深い感銘を與へました。一方、明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すっかり衰へてしまひました。これが、やがて満洲から清が興るものになるのです。

朝鮮の役に際して、秀吉の用ひた扇面が、今に傳はつてゐます。一面には、日本と明との日常のことは、が、いくつか書き並べてあり、他の一面は、日本、朝鮮、支那の三國を

武力戦ではかなはないと見たか、明は、ふたたび行長を通して、たくみに講和を申し出ました。秀吉は、これを許し、ひとまづ全軍に引きあげを命じました。ところが、明の使節が持つて来た國書の中には、特に爾を封じて日本國王と爲すといふ、無禮きはまる文句がありました。秀吉は大いに怒つて、その使ひを追ひかへし、再征の命令をくだしました。

慶長二年、ふたたび行長清正らが先手となつて朝鮮へ渡り、たちまち明との講和交渉が決裂すると、一五九七年、日本は再び朝鮮に出兵する。酒・慶長の役(丁酉倭乱)である。この時、島津義弘の戦前の教科書は、この戦いの中で

日本軍が示した「りつばなふるまひ」は「朝鮮の人々に深い感銘を与へた」というが、それは事実だろうか？



秀吉の扇

深い感銘を與へました。一方、明は、この役で、多くの兵力と軍費をつひやし、すっかり衰へてしまひました。これが、やがて満洲から清が興るもとになるのです。

朝鮮の役に際して、秀吉の用ひた扇面が、今に傳はつてゐます。一面には、日本と明との日常のことは、いくつか書き並べてあり、他の一面は、日本・朝鮮・支那の三國を



NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年 第8集」より

第二節 明代の文学に描かれた 秀吉像



姜沆「看羊録」(『睡隠集』所収)

姜沆(一五六七―一六一八)、号は睡隠。一五九三年、科挙に合格し、朝鮮王朝の官僚となる。一五九七年、秀吉の第二次朝鮮出兵(丁酉倭乱Ⅱ慶長の役)の際に捕虜となり、日本で三年近い抑留生活を送った後、一六〇〇年に帰国した。「看羊録」は、その間の見聞を綴ったもの。



睡隠姜沆先生像

被虜人（拉致被害者）が見た耳塚

一五九八年、秀吉の死により、朝鮮出兵は終わった。翌一五九九年、日本に拉致された朝鮮の人々が、京都の耳塚で犠牲者を弔う法事を行うことになり、姜沆はその求めに応じて耳塚供養の追悼文を起草した。

＊左写真は姜沆「看羊録」（『睡隱集』所収）

岸榎後丙申秋
杞溪俞榮志

睡隱看羊録

賊中封疏

宣務郎前守刑曹佐郎臣姜沆

齋沐百拜而向慟哭謹上言

正倫立極盛德弘烈大王主上殿下伏以ハ臣在上
年丁酉以分戶曹叅判李光庭郎廳督運揚統兵糧
餉于湖南糧餉既集而賊鋒已犯南原光庭亦向
京師臣與巡察使從事官金尚寓傳檄列邑收召義
兵思饌之士聚者僅數百人而顧戀家屬旋即解散
臣不得已舟載父兄弟妻子遁西海以謀面上高卒
齟齬不能運船倘倖海曲猝遇賊賊臣自度不得脫

兩耳鼻則一也。今一卒各割我國人鼻以代首級。輸
致倭京。猶成一丘陵。埋之。大佛寺前。幾與愛陽山腰
平。血肉之慘。舉此可知。我國人聚米以祭。要余作文。
有鼻耳。西峙脩蛇。東蔽帝祀。藏鹽鮑魚。不香之語。庚
子二月。賊將佐渡。招守倭使。寬吾家防守。守倭奉令。
即出去。乃往見舜首座。永利涉之路。惟取四月初二
日。發倭京。既乘舫。賦一絕。白聖恩遠及。害中因絕域。
歸帆近麥秋。蓬島渺茫滄海闊。却將忠義滿孤舟。行
至壹岐島。以風雨留。旬登山祭天。以祈風。翌曉月
星明。概風伯指路時。五月五日也。

被虜人（拉致被害者）が見た耳塚

秀吉がわが国を再侵した時、諸將
に命令を下し、「人はそれぞれ兩耳
があるが、鼻は一つである」と言っ
て、すべての兵士に、わが国の人の
鼻をそいで首級に代え、倭京に送る
よう命じた。それが積もって一つの
丘のようになったので、大仏寺（方
広寺）の前に埋めた。



方広寺

This aerial photograph shows a residential neighborhood with a grid-like street pattern. A major road runs vertically through the center, intersecting with a horizontal road. To the left of the intersection is a large, dense residential block. To the right, there are more houses, a parking lot, and a large green area. The labels are placed over specific features: '方広寺' is over a large white building, '旧方広寺 (大仏寺) 跡地' is over a green area, '豊国神社' is over a green area, and '耳塚' is over a small green area.

旧方広寺
(大仏寺)
跡地

豊国神社

耳塚



耳塚（鼻塚）

兩耳鼻則一也令一卒各割我國人鼻以代首級輸
致倭京牆成一丘陵埋之大佛寺前築壘愛陽山腰
平血肉之慘舉此可知我國人聚米以祭要余作文
有鼻耳西峙脩蛇東藏帝祀藏鹽鮑魚不香之語庚
子二月賊將佐渡招守倭使寬吾家防守守倭寨今
即出去乃往見舜首座永利涉之路帷殿四月初二
日發倭京既乘舩賦一絕白聖恩遠及害中因絕域
歸帆近麥秋蓬島渺茫滄海闊却將忠義滿孤舟行
至壹岐島以風雨留一旬登山祭天以祈風翌曉月
星明掀風伯指路時五月三日也

姜沆「看羊錄」(『睡隱集』所收)

わが国人が米を集めて(耳塚を)
祭ることになり、私に弔文を作るよ
う求めたので、こんな語を入れた。

鼻耳は西に峙(そばだ)ち

脩蛇は東に蔵(かく)る

帝羆は塩に蔵(かく)れ

鮑魚は香らず

* 「脩蛇」は大蛇。朴鐘鳴氏は「句全体の
意味不詳」とする(東洋文庫訳注)

Q

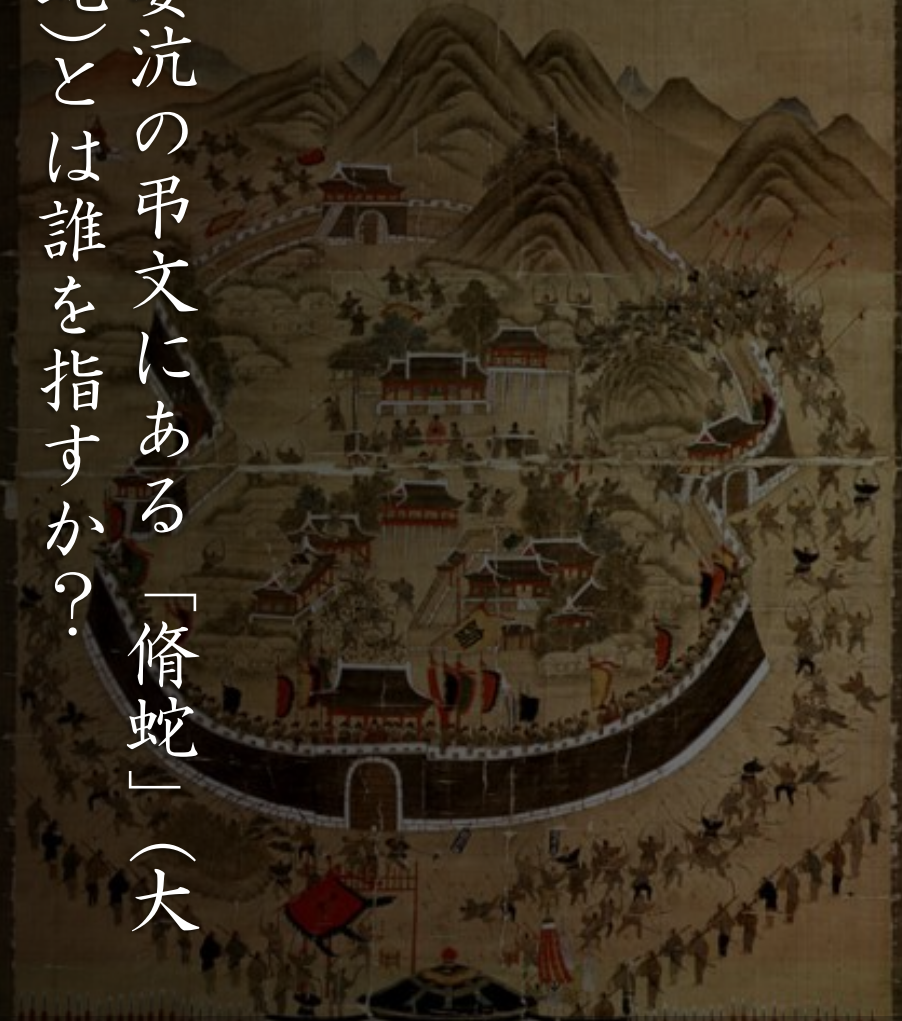
姜沆の弔文にある「脩蛇」(大蛇)とは誰を指すか？

①李舜臣

②豊臣秀吉



釜山鎮殉節図



東萊府殉節図

兩耳鼻則一也令一卒各割我國人鼻以代首級輸
致倭京牆成一丘陵埋之大佛寺前築塹愛陽山腰
平血肉之慘舉此可知我國人聚米以祭要余作文
有鼻耳西峙脩蛇東藏帝羝藏鹽鮑魚不香之語庚
子二月賊將佐渡招守倭使寬吾家防守守倭寨今
即出去乃往見舜首座永利涉之路帷殿四月初二
日發倭京既乘舫賦一絕白聖恩遠及害中因絕域
歸帆近麥秋蓬島渺茫滄海闊却將忠義滿孤舟行
星明掛風伯指路時五月二日也

姜沆「看羊錄」(『睡隱集』所収)

わが国人が米を集めて(耳塚を)
祭ることになり、私に弔文を作るよ
う求めたので、こんな語を入れた。

鼻耳は西に峙(そばだ)ち

脩蛇は東に蔵(かく)る

帝羝は塩に蔵(かく)れ

鮑魚は香らず

*脩蛇は東の阿弥陀ヶ峰に埋葬された秀吉
を指す。帝羝は遼の太宗の遺体が保存の
ため塩漬けにされたことを漢人が揶揄し
た言葉。鮑魚は悪しく臭いものを指す

An aerial photograph of a densely populated Japanese town. A river flows through the center, with a railway bridge crossing it. The town is characterized by a high density of traditional-style buildings with grey tiled roofs. Several baseball fields are visible, interspersed among the residential areas. To the right, a steep, forested hill rises, partially obscuring the town's edge. Two labels in green boxes with white text are overlaid on the image: '耳塚' (Mimizuka) on the left and '豊国廟' (Toyokuni-dera) on the right.

耳塚

豊国廟

袁黄(了凡)* 『斬蛟記』梗概(一)

青木正児 「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

関白平秀吉は日本人でも無く、中国人でも無い、蓋し妖怪変化の者である。昔、旌陽許真君が蛟を斬った時、一匹の小蛟が有って其の腹から出た。小蛟は未だ別に犯せる罪が有るわけでも無かったからして、誅を加へず其まま江中に縦って大海に帰せしめた。すると其の小蛟は日本の紅鹿江なる銀蛟山に往って住んだ。それから一千二百余年間、物類を害すること記し尽くせぬほどであつたが、今や又化して人となつた。其れが即ち平秀吉である。

*袁黄(生没年不詳)は明末の思想家。秀吉の第一回朝鮮出兵の際、宋応昌の参謀として従軍した

*旌陽許真君、許遜(二三九〜三七四)、東晋の道士。

袁黄(了凡)『斬蛟記』梗概(二)

青木正児 「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

秀吉は一兵卒より身を起し旧関白を殺して其位を奪ひ、智力を以て十六洲を征服し、各洲の民は其の妖精なるに気付かず、但其の奸智に長けたるを見てひたすら之に畏服してゐた。琉球や朝鮮も之に朝貢し敢て礼を失はなかつたが、突然万曆二十年四月に至り、彼は二十余万の大軍を率ゐて朝鮮を犯し、対馬から釜山鎮に上陸した。鮮人は風を望んで逃避した。秀吉は王京に拠り、(小西)行長は平壤に拠り、(加藤)清正は安辺に拠り、沿道には皆兵を屯せしめて互に連絡を保ち、其意は実に遼東を犯し北京まで攻寄せんと欲するらしいのであつた。

袁黄(了凡)『斬蛟記』梗概(三)

青木正児「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

朝鮮は我国に急を告げて来た。乃ち朝廷は宋公を総司令とし、予(この小説は袁黄の一人称で語られてい
る——引用者)及び劉玄子をして参謀として出征せしめた。

(中略)

祖師は鷺の群を江中に放ち円形に囲ませた。鷺群は争い鳴いてすさまじい響を立てた。黄石公はまじなひの符を書して法を行うた。すると一物が囲みの中に在ってぬっと首をもたげた。其のさま巨鐘の如く、赤髪面に被り其面甚だ醜く、両眼は黄色できらきらと光ってゐる。

袁黄(了凡)『斬蛟記』梗概(四)

青木正児「支那戯曲小説中の豊臣秀吉」より

祖師は矢庭に劍を揮うて一撃する
よと見れば、其頭はころりと墜ち、
其身は水面に浮んで來た。長さ約數
千丈、蛇形にして魚鱗あり。あたり
は霧の如く白き一種異様の氣が充塞
して、咫尺(しせき)を辨ぜず。やや
暫くして氣は霧れ、祖師は徐茂公に
命じて其首を取って之を埋めしめた。
是れ實に万曆二十一年正月七日の
事であつた。

『斬蛟記』はいつ書かれたのか？

『斬蛟記』は、豊臣秀吉の死を「万暦二一年（一五九三年）正月七日」としている。……秀吉が急死したのは、万暦二六年（一五九八年）八月十八日であり、……同年十一月には福建巡撫・金学曾が「関酋平秀吉、死す。内乱まさに起こらんとす」と報告しているから……この小説が書かれたのは、それ以前であることが証明できよう。

王勇『中日関係史考』

（中央編訳出版社、一九九五年）



	作者	作品名	内容
明代	袁黄	斬蛟記	豊臣秀吉に化けた蛟(大蛇)を退治する話
	佚名	戚南塘剿平倭寇志伝	
	蕭応宮	朝鮮征倭紀略	
	銭塘西湖 隠叟	胡少保平倭記	
	佚名	(戯曲) 蓮囊記	
清代	陳忱	水滸後伝	水滸伝の英雄・李俊がシャム王となり、倭の関白と戦う話
	青心才人	金雲翹伝	
		野叟曝言	倭寇の頭目・関白木秀とその妻を退治する話
	佚名	綺楼重夢	
	李石川	緑野仙踪	
	陳朗	雪月梅伝	
	夢花居士	蜃楼外史	
	佚名	十二蟾	
	佚名	四香縁	

Q

秀吉の朝鮮出兵は、いまも東アジアの人々の間で苦難の歴史として記憶されている。昨年、韓国でこの戦いで活躍した将軍を描いた映画が大ヒットになった。その将軍とは？

① 李舜臣 이순신

② 安重根 안중근



韓国映画『명량(鳴梁)』*

二〇一四年公開の『명량(鳴梁)』は、秀吉の朝鮮出兵の際、朝鮮水軍の提督と活躍した李舜臣將軍の鳴梁での海戦を描いた映画。

韓国では観客動員数が史上最高の一七〇〇万人*を突破する大ヒットとなった。

*邦題「バトル・オーシャン 海上決戦」

*韓国の総人口約五千万の三四%に当たる



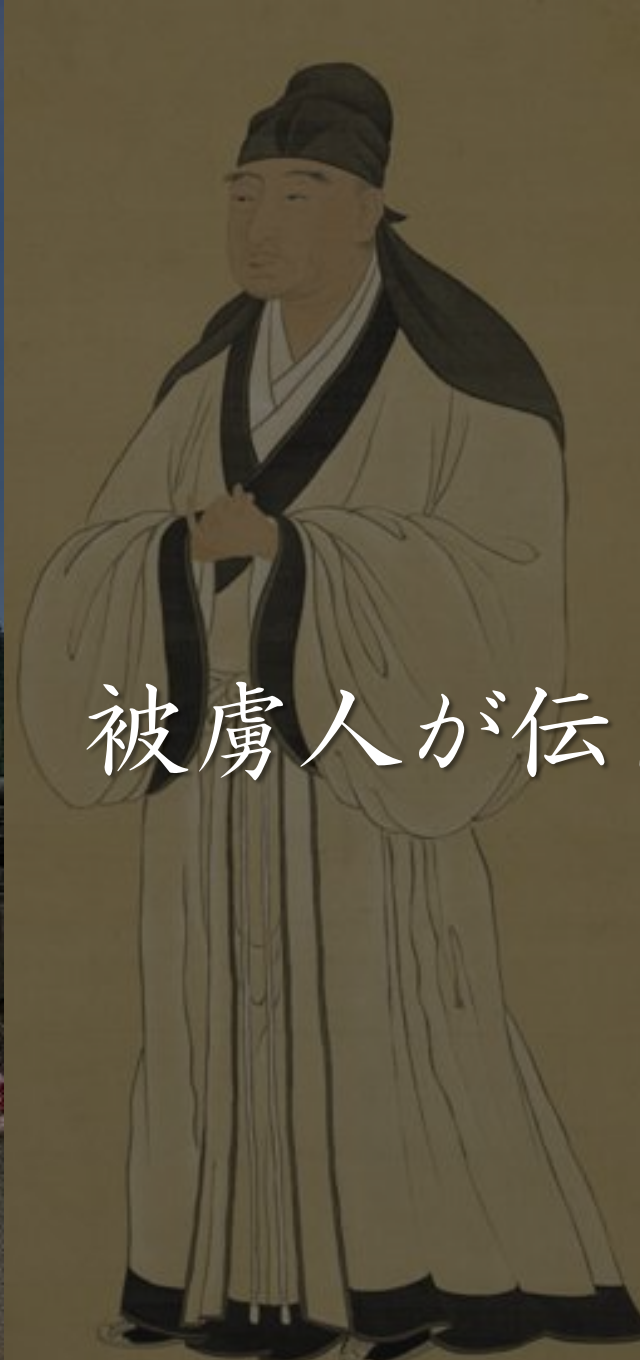
韓国映画「鳴梁(バトル・オーシャン 海上決戦)」より

第三節

被虜人が伝えた文化



姜沆 (1567-1618)



藤原惺窩 (1561-1619)



林羅山 (1583-1567)

姜沆と藤原惺窩

姜沆（一五六七—一六一八）は、京都に幽閉されている間に、幾人かの日本の僧侶と親交を持つ。その中に舜首座という漢文に通じた禅僧がいた。後年、近世儒学の祖と呼ばれることになる藤原惺窩（一五六一—一六一九）である。



睡隱姜沆先生像

姜沆と藤原惺窩

私は、倭の都に連れてこられてからというものの、倭国の内情を知ろうと思い、時々倭僧と接した。その中に妙寿院の舜首座（藤原惺窩）という者がいた……彼は大変聡明で、古文を理解し、書について通じていないものはない。

姜沆『看羊録』賊中聞見録



睡隱姜沆先生像

内山書院（全羅南道靈光郡仏甲面）の姜沆像



小倉忠成
文政元年五月
三十一日
三十一日

Q

藤原惺窩はもともとどのような身分の出身であつたか？

①公家

②武士



近世儒学の祖・藤原惺窩

(一五六一〜一六一九)

公家の家に生まれた藤原惺窩は、武士による力の支配を嫌い、中国や朝鮮に平和で秩序ある社会をもたらし、儒教に深い関心を抱いていた。

姜沆との交流を通じて朝鮮の国教である朱子学に傾倒した惺窩は、やがて仏教を離れ、朱子学の研究と教育に専念し、近世儒学の祖となった。



Q

江戸時代、儒教の官学化に貢献した林羅山は、どのような身分の出身であつたか？

①町人

②武士



藤原惺窩と林羅山（一五八三―一六五七）

林羅山は京都の町人の出であつたが、師である藤原惺窩の推挙により徳川幕府の顧問となり、武家諸法度の撰定や朝鮮通信使の接待など、政治や外交にその手腕を発揮した。

羅山は、さらに上野忍岡（しのぶがおか）に私塾や書庫、孔子廟を設け、儒教の官学化に貢献した。



姜沆 (1567-1618)



藤原惺窩 (1561-1619)



林羅山 (1583-1657)

Q

藤原惺窩と林羅山はなぜこのような衣装を身に着ているのか？

① 藤原惺窩はもと僧侶であったため、その一門は僧衣を着る伝統があった

② 惺窩や羅山は中国や朝鮮の平和で秩序ある儒教世界にあこがれていたため



睡隠姜沆先生像





朱子像 (歷聖大儒像)



藤原惺窩 (1561-1619)



林羅山 (1583-1657)

平和で秩序ある世界に憧れた惺窩

（藤原惺窩）はかつてこう言った。

「実に残念です。私は大唐に生まれることもできず、朝鮮に生を得ることもできず、日本のこのような時代に生まれるとは。私は辛卯（一五九一年）三月、薩摩に下り、朝鮮に渡ろうと考えましたが、朝鮮出兵のために海を渡る望みは叶いませんでした」



小淵沢蔵 藤原惺窩
文政元年五月通使王様様
[Red Seal]



NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年第8集」より

秀吉の朝鮮出兵の再評価

秀吉は没後、朝廷から神号を与えられ、豊国神社が建立されたが、その後、徳川幕府の意向により神号は剥奪され、神社も廃絶となった。

ところが明治時代になると、「皇威を海外に宣べ、数百年の後、猶も彼をして寒心せしむ。その国家に大勲功ある、今古に超越する」と再評価され、神社が再建された。

耳塚

This is an aerial photograph of a densely populated Japanese town. The town is characterized by a high density of traditional Japanese-style buildings with dark, tiled roofs. A railway line runs horizontally across the lower portion of the image. To the right, a large, steep hill covered in lush green forest rises above the town. Three specific locations are highlighted with green rectangular labels containing white Japanese text. The label '耳塚' (Mimizuka) is located in the upper left quadrant. The label '豊国神社' (Toyokuni Shrine) is located in the center of the image, just above the railway line. The label '豊国廟' (Toyokuni Shrine) is located on the right side, near the base of the forested hill. The overall scene depicts a typical Japanese urban landscape with a mix of traditional architecture and modern infrastructure like the railway.

豊国神社

豊国廟

An aerial photograph of a residential neighborhood. A wide road runs vertically through the center, intersecting with a horizontal road. To the left of the intersection is a dense residential area with many small houses. To the right is a larger area with more trees and a few larger buildings. A label '方広寺' is placed over a building in the upper right. Another label '耳塚' is placed over a small circular area in the lower left. A third label '豊国神社' is placed over a building in the lower right.

方広寺

耳塚

豊国神社



「耳塚はいま」 （鈴木ゼミ2014年度生制作）

史跡方広寺石罍および石塔（昭和44年4月12日指定）



「耳塚（鼻塚）」

この塚は、16世紀末、天下を統一した豊臣秀吉がさらに大陸にも支配の手をのばそうとして、朝鮮半島に侵攻したいわゆる文禄・慶長の役（朝鮮史では、壬辰・丁酉の倭乱、1592～1598年）にかかる遺跡である。

秀吉輩下の武将は、古来一般の戦功のしるしである首級のかわりに、朝鮮軍民男女の鼻や耳をそぎ、塩漬にして日本へ持ち帰った。それらは秀吉の命によりこの地に埋められ、供養の儀がもたれたという。これが伝えられる「耳塚（鼻塚）」のはじまりである。

「耳塚（鼻塚）」は、史跡「御土居」などとともに京都に現存する豊臣秀吉の遺構の一つであり、塚の上に建つ五輪の石塔は、その形状がすでに寛永2年（1643）の古絵図にみとめられ、塚の築成から程ないころの創建と想われる。

秀吉が惹き起こしたこの戦争は、朝鮮半島における人々の根強い抵抗によって敗退に終わったが、戦役が遺したこの「耳塚（鼻塚）」は、戦乱下に被った朝鮮民衆の受難を、歴史の遺訓として、いまに伝えている。

京 都 市

耳塚（鼻塚）の解説文（京都市史跡方広寺石罍および石塔）

一五九二年から九八年まで七年に及んだ秀吉の朝鮮出兵は、東アジアの人々の心に負の対日イメージを刻み込んだ。

一方、朝鮮の儒学者が伝えた朱子学は、日本に秩序ある太平の世をもたらし、陶工たちが伝えた製磁の技術は、日本に新たな産業を誕生させ、中国貿易への依存度を下げた。

日本との戦いで財政破綻した明が滅び、中国東北部の狩猟農耕民であつた満州族が清を興すと、日本は中国との外交関係を回復せぬまま、蝦夷、朝鮮、琉球との間に独自の国際秩序を築いていった。

参考文献

- 姜沆、朴鐘鳴訳注『看羊録―朝鮮儒者の日本抑留記』（東洋文庫四四〇、平凡社、一九八四年）
- 青木正兒「支那小説戯曲中の豊臣秀吉」（『青木正兒全集』所収）
- 孟森「袁了凡斬蛟記考」（上海商務印書館、一九一六年）
- 王勇「明清戯曲小説中の倭寇題材―明代短編伝奇《斬蛟記》評述」（『中日関係史考』中央編訳出版社、一九九五年）
- 鈴木健一『林羅山』（ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、二〇一二年）